

神戈陵を渡る風2

令和4年度 川辺高校 校長通信 第061号(通算)

令和4年7月1日(金)発行

ついこの間、6月になったと思っていましたが、短い梅雨が明け、今日から7月。期末考査も今日で、終了しました。夏休みは、『夏を征するもの受験を征す』といわれています。3年生にとっては、これからが正念場です。十分な事前準備を心掛け、気負いすぎることなく、冷静に自分の状況を分析し、努力を積み重ねてください。1・2年生は、たっぷりある時間を計画的に過ごすようにしましょう。油断していると、何もしないまま夏休みが終わってしまいます。「時は金なり」とも言います。過ぎた時間は戻ってきません。有効に使うためには、これも事前の準備(心掛け)が欠かせないものです。

半夏生 はんげしょうず

7月になり、カレンダーをめくると、大きく青い海と青い空の写真が目に入ってきます。ついに本格的な夏がやってくると、期待に胸が高鳴ります。

この時期、七十二候では「半夏生(はんげしょうず)」となります。半夏が生えはじめる頃で、田植えを終わらせる目安とされてきました。

毎年、7月1日～6日頃が半夏生となります。

ところで、この半夏とはいったいなんでしょう



か? その正体は、カラスビシャク(←)という薬草だそうです。サトイモ科の植物で、夏の半ばに花を咲かせることから、半夏と呼ばれています。地下にできる球茎(きゅうけい)は、乾燥させると生薬になり、咳止めや酔い止めに利用されてきたそうです。また、ずばり



そのままハンゲショウ(←)という名前前の植物もあり、このころに花を咲かせます。ハンゲショウの特徴は、

葉の半分が白く染まり、くっきりと、白くなった部分があります。この植物は、漢字で、半夏生のころに花を咲かせることから「半夏生」、または葉の半分が白くなることから「半化粧」などと書きます。

さらに、半夏生は農事の目安である「雑節(ざっせつ)」のひとつにも数えられています。農家はこの日までに田植えを終え、休みをとるようにしていました。例年なら、梅雨さなかで雨の多い時期ですが、今年は梅雨明けしました。

今年、復活 (規模を縮小して開催予定)

祇園祭を学ぶ



川辺祇園祭は、1925年(大正14年)から続く伝統ある祭りです。牛がひく荘厳な御所車。美しく飾ら

れた各通り会の山車、男神輿、女神輿、市内団体・企業の踊り連などが、歩行者天国となった川辺町商店街約1.5kmを古式ゆかしく、華やかに練り歩きます。川辺は、仏壇製造で有名な街だけあって、御所車の飾りも本場京都に負けていません。(素晴らしい伝統)

さて、祇園祭とはどんな祭りなのでしょう。鹿児島では、「おぎおんさあ」と呼ばれています。(鹿児島市などでも開催されています。)

元々は、全国に、祇園信仰(ぎおんしんこう)というものがあります。これは、牛頭天王(ごずてんのう)および素戔嗚尊(すさのおのみこと)という疫神(やくしん)に対する信仰です。それは、疫神は祀(まつ)られることによって疫病(えきびょう)を鎮圧する善神に転化するという考えから(テストで苦手教科の克服することに似ている)、災厄(さいやく)や疫病をもたらす御霊(ごりょう)を慰(なぐさ)め遷(うつ)して平安を祈願するものとして信仰されました。平安時代の京都で、流行した疫病への恐怖を背景に、祇園社は、信仰を集め、やがて全国の祇園信仰がひろまったようです。この神の祭りが夏に行われるのは、おそらく夏にいちばん疫癘(えきれい)が流行したためだと考えられます。また、一般に祇園信仰は、水辺における禊祓(みそぎはらい)の習俗と関係するところ深く、その祭りも川や海の近くで行われることが多いようです。

校長講話より

令和4年6月20日(月)

人の値うち

何時(いつ)か もんぺはいて バスに乗ったら 隣座席の人は私を おばはんと呼んだ 戦時中よくはいた この活動的なものを どうやらこの人は 年寄りの着物とおもっているらしい よそ行きの着物に羽織を着て 汽車に乗ったら 人は私を奥さんと呼んだ どうやら人の値うちは 着物で決まるらしい

講演がある 何々大学の先生だと言え 内容が悪くても 人々は耳をすませて聴き 良かったと言う どうやら人の値うちは 肩書きで決まるらしい

名も無い人の講演には 人々はそわそわして 帰りを急ぐ どうやら人の値うちは 学歴で決まるらしい

立派な家の娘さんが 部落にお嫁に来る でも生まれた子供はやっぱり部落の子だと言 われる どうやら人の値うちは 生まれた所によって決まるらしい

人々はいつの日

このあやまちに 気付くであろうか

いかがでしたか。この詩は、作者の江口いとさん自身の体験をもとに書かれたものです。

江口さんは、愛媛県で生まれ育ち、25歳で結婚。2児の母親となつてすぐに、夫を戦争で亡くされました。その後、苦勞しながら2人の子どもを育て上げます。

被差別部落出身という理由で、息子、孫の三代にわたつて差別された江口さんは、生活の中から自然にあふれる思いや、部落差別に対する怒りを詩や短歌にしました。また、差別解消に向けた講演も意欲的に行い、多くの共感と感動を呼びました。差別のない社会が一日も早く訪れることを願いながら、生涯をかけて差別と闘つてこられた方です。

先入観や誤解は「偏見」を生み、「偏見」からは「差別」が生まれます。江口さんの代表作ともいわれる、この詩に込められた思いをしっかりとくみ取り、偏見をなくすために、まず正しく知ること、そして相手の気持ちを考え痛みを感じる感性を大切にしたいものです。

江口さんは、『部落に生まれたとて』という詩の中で、こんな一節を残されています。

「恥じなければならぬのは、人を差別する 淋しい心です。」

7月のいろ

玉蜀黍色
とうもろこしいろ



玉蜀黍色(とうもろこしいろ)

皮をむいたら顔をのぞかせるトウモロコシの実のような優しい黄色です。柔らかくもハリのある生き生きとした色は、江戸時代に大流行しましたが、今となっては当時の詳しい染色法は分からないそうです。

生徒会長選挙 6月23日

今回の選挙も、立候補者が8名となり、昨年に引き続き大激戦となりました。当日開票が行われ、次の3名が選出されました。



生徒会長

清水 杏華(2-1)

副会長 2人

森 紗香(2-1)

上窪 倫功(2-2)

みんなが協力して、

辺高の生徒会活動を盛り上げましょう。



突然 QUIZ(クイズ) 第四弾

次の四字熟語、間違いはどこ?

疑心暗記